

きくちけんじろう 菊池謙二郎

学校改革により生徒に慕われた名校長 水戸市



(茨城新聞社提供)

慶応3年(1867) - 昭和20年(1945)。水戸天王町〔水戸市天王町〕出身。水戸藩士の子に生まれる。明治15年(1882)、茨城尋常中学校〔水戸中学校の前身で現・水戸一高〕に入学したが、2年で中退し上京、東京帝国大学〔東京大学〕に入学する。卒業後は岡山、千葉の中学や、第二高等学校〔東北大学〕で校長を歴任の後、明治41年(1908)、母校の水戸中学校の校長事務取扱となり、大正元年(1912)に校長となる。学校改革を断行、校紀の肅正を図るとともに、生徒の自主性を重んじる新しい教育を導入し職員や生徒から慕われる。大正10年(1921)、「国民道徳と個人道徳」と題した講演内容が問題となって、校長辞職に追い込まれた際には、生徒たちが復職を求めた同盟休校事件へと発展。水戸学の研究者としても知られる。

「先生、辞めないでください！」

生徒たちは目に涙を浮かべ、口々に叫びました。大正10年(1921)2月12日、水戸中学校〔水戸一高〕の校長、菊池謙二郎が退任するときのことです。

生徒たちから慕われた校長、菊池謙二郎は、江戸時代が終わる年に水戸藩の武士の家に生まれました。幼い頃から学問に励み、明治15年(1882)、15歳で水戸中学校の前身である茨城尋常中学校に入学しました。中学で勉強するうちに、謙二郎は、東京でさらに多くのことを学びたいと考えるようになりました。そして、2年生が終わると同時に、東京帝国大学〔東京大学〕への進学を目指して上京し、東京大学予備門〔後の第一高等学校の前身〕という学校に進みました。仲間には、夏目漱石や正岡子規らがあり、ここで英語やフランス語を身につけ、明治23年(1890)、東京帝国大学に入学したのです。大学を卒業後、謙二郎は教育者の道を歩みますが、その一方で、明治32年(1899)には『藤田東湖伝』という書物を出版し、歴史学者としての第一歩も踏み出します。

明治41年(1908)、歴史の研究を進めるため、教育者としての職を辞め、水戸に帰ってきていた謙二郎のところに、茨城県知事の森正隆が訪ねて来ました。

「菊池さん、実はあなたの母校、水中〔水戸中学校のこと〕は、乱れていて、学業に身が入らない生徒が少なくありません。お願いです。あなたの力で、水中を立て直していただけないでしょうか。」謙二郎は悩みましたが、このまま放っておくわけにはいかないと、水戸中学校の校長を引き受ける決心をしました。

校長となった謙二郎は、早速学校改革に乗り出し、学習や生活を厳しく規制したので、最初



同盟休校でデモ行進する生徒たち
(茨城新聞社提供)

は生徒たちも反発しました。しかし、厳しいながらも一人一人にわけへだてなく接したため、生徒たちは、次第に信頼を寄せていきました。謙二郎はまた、生徒が自主的に学習に取り組めるような、欧米の新しい教育方式も取り入れました。改革には、生徒がより学習に集中できるようにとの工夫が込められていたのです。

大正10年(1921)2月、事件は起きました。「国民道徳と個人道徳」と題した講演の内容が問題となり、謙二郎は校長を辞めなければならなくなったのです。11日、謙二郎が辞めることを知らされると、約800人の生徒全員は、謙二郎の復職を求め、学校を休むストライキ、「同盟休校」に入ることを決めました。翌日は謙二郎の退任式です。謙二郎は泣きながら生徒との別れを惜しみ、生徒たちもまた、泣きながら謙二郎を送りました。生徒たちの「同盟休校」は、1週間が経っても収まりませんでした。心配になった謙二郎は20日、生徒たちに自分の家に来るように呼びかけました。翌朝、謙二郎は、自宅前にやって来た生徒たちにこう言いました。

「ありがとう。だが、わたしのためにこれ以上学業をおろそかにしてはいけない。わたしのことを思うのならば、今日から学校に戻り、真面目に勉強を続けてほしい。」

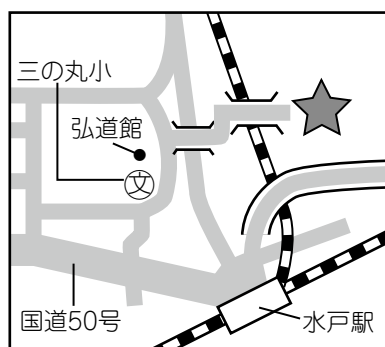
謙二郎の思いを知った生徒たちは、学校へ戻ることを決め、そろって登校しました。「同盟休校」の間、生徒たちは卒業生の指導も受けながら、自主的に学習に取り組んでいたそうです。菊池謙二郎の教育は、生徒たちの中にしっかり根付いていました。

ゆがりのスポットに行ってみよう

茨城県立水戸第一高等学校

所在地 水戸市三の丸3-10-1

内容 本館前の植え込みには、謙二郎が校長時代に制定した「至誠一貫」、「堅忍力行」の校是が刻まれた碑があります。



おもな 参考文献

『郷土史にかがやく人びと』（青少年育成茨城県民会議・1971）

『菊池謙二郎』（森田美比・耕人社・1976）